
勇者はひらりと身をかわし

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はひらりと身をかわし

【Nコード】

N7652Z

【作者名】

草木

【あらすじ】

腐れ大学生の工藤宮人は、ある日よんどころない事情から異世界に転移する。「今の時代なかなか就職も厳しいし、こっちで生きていくのも悪くないか」などと悠長に構える暇もなく、次から次へと芽づる式の災難が彼を襲う。気の毒な工藤に明日はあるのか。たぶん無い。そんな新感覚回避系ファンタジー。

イ・端緒にして日常

ロールカーテンごしに差しこむ夕日が、室内をあかね色に染めあげている。

おれは目を擦って目やにを落とすと、腥いあくびをして体を起こした。

居間で寝ちまったのか。

缶ビールを数本呑んだ程度なのに、こめかみの奥が疼く。コタツで寝たせいで、軽い脱水症状になっているらしい。

ふらふらと立ちあがって台所で水をがぶ飲みする。きんきに冷えた真冬の水が胃袋にしみる。胃粘膜も荒れ放題なのか。

「つまみ食つとくんだったか」

職場から帰宅し、そのまま駅前のコンビニで缶ビールを数本買ったものの、肝心かなめのツマミを買い忘れた。気づいたのは国道の横断歩道を渡ってからで、今さら赤信号を待って買いに戻るのも癪で、そのまま帰宅したのだった。

うう、体冷えちまった……。

おれは二の腕をさする。

コタツで寝ると、掛け布団から露出した上半身が冷えてよろしくない。頭ではそう理解しつつも、コタツでぬくぬく微睡む気持ちよさに、ついつい長居してしまう。

「あー、今日早番か」

カレンダーの 早 のマークを見て、おれは忌々しさに舌打ちする。

早番は午後十時からの勤務なので、遅くとも九時には家を出なくてはならない。これから風呂を沸かし、夕飯の仕度をするとなると、いつまでもうだうだしてられない。

冷凍肉並みにこちこちの上半身を軽くひねって目覚まし代わりにすると、おれはテレビの電源を入れ、それをBGMにして米を炊く

仕度に取りかかることにした。

男の一人暮らしだろうと最低限米くらいは炊け、というのが栃木の両親のモットーだ。

その信条と関係あるのか知らんが、毎月、おれの住むアパートあてに米と野菜が届く。おかげで大学生活を始めて二年間、主食に不自由することはなかった。

もつとも、向こうはおれが東京でまじめに刻苦勉強していると思っているからこそ、まめに仕送りをしてくるんだろう。

実際は講義にもろくに出席せず、毎日バイトとコンパ三昧の自堕落な生活を送っているとは夢にも思っまい。

「うし、そろそろ出るか」

パソコンの時刻が二十一時を指したのを見ると、おれはブラウザを閉じてスタンバイにした。

ひとつ風呂浴びて飯を食ったあと、仕事に行くまでだらだとネットをするのが至福のひとつだ。

だが、楽しい時間というのはまたたく間に過ぎてしまうもので、早くも次の勤務がやってくる。まったくもって気が滅入る。

学生だから週四日の勤務だが、社会人はこれを週五日、ヘタすると土日出勤までこなすんだからおそろしい。日本人働きすぎ。

けどま、食い扶持を稼がにや暮らしは成り立たんわけで、世の中ってやつはホントに世知辛いもんだ。

そんな愚痴をほざきながら、服を着替え、高校時代から愛用のシヨルダーバッグをひっ提げて家を出た。

おれが働いているのは、都内にある郵便局の某支店だ。そこでゆうメイトの深夜勤を三ヶ月前からやっている。

郵便局というのは、基本、二十四時間人がいて働いている。昼は昼で差立やら何やらで忙しいらしいが、夜も結構な忙しさだ。

支店の裏口につき、ロッカーでエプロンに着替えて郵便課の前に

並ぶと、すでに先輩メイトたちが数人集まってきた。

「あ、工藤さん」

おれを見つけるなり、こぼれるような笑顔で出迎えてくれたのは大学生の林太一だ。

太一はおれより一年先輩なのだが、年齢では年下なこともあっておれをさん付けする。

大学ではソフトテニス部所属らしいが、青白い肌と分厚いメガネ、くせのあるセミロングの黒髪という明らかにインドア系サークル風のいでたちなのが気になる。

「うちの部はみんなこんな感じですよ。雨の日は部室でスマブラ大会やニコニコ鑑賞会とかしてますし」

「おれの知ってるテニサーと違う……」

「今度、ニコニコ動画に踊ってみた系の動画をうpる予定なんですよ」

「それ、もはやダンス部なんじゃね？」

とまあ、こんな彼だが、ゆうメイトとしては有能らしく、入社一年目ながら特殊や窓口などに入って活躍している。

「へえ、太一くんテニスやるんだ？」

太一の横の中年太りの男性が、おれたちの会話に割り込んできた。辻木昇、という髪に白いものが混じった四十すぎの黒ぶちメガネのおっさんだ。ゆうメイト三年目のベテランさんだ。

以前は建築資材メーカーの下請けで働いていたが、過労で倒れて会社を辞め、今はバイトの掛け持ちで口に糊しているらしい。

バイトを三つもやっていても「以前の職場に比べたら楽」だそうだから、前職のブラックさ加減は相当だったようである。

「おれもさあ、若い頃は結構テニスとかやってたんだよね。太一くんのと違って、おれのは硬式なんだけどさあ」

辻木さんがねちねちした口調でしゃべる。語尾に「さあ」をつけるのは彼の特徴だ。ゆうメイトの深夜勤は、結構変わっている人が多くて面白い。

そうこうしているうち、課長代理がやってきて、朝礼を始めた。夜なのに朝礼はおかしいが、必ず「おはようございます」から始める。そういう慣例だ。

他の支店の窓口で詐欺があっただの、重い米袋に果物の箱が潰される事案が発生したあの、と課代がくどくどと能書きを垂れるのを話半分に聞き流す。

隣の林くんは相づちを打ちながら真剣に聞いている。相変わらずのまじめくんだ。

辻木さんはおれ同様、うわの空だ。養豚場の豚のようなたるんだ目つきで、銀色のざらざらした不精ひげを撫でている。

出勤簿にハンコをつき、今日の担務を確認する。うちの支店では、仕事はローテーションでまわしているため、日によって受け持つ仕事異なる。

「また通常とコツか」

新入りのおれは勤務の大半が通常区分だ。所謂、普通の葉書や封筒、バルクと呼ばれるダイレクトメールやカタログなどを、配達区分に沿って仕分ける単純作業だ。

「最初のうちは、みんなそんなもんですよ。慣れてきたら、税付きとか区分機とかやられますから」

税付きと言われても、新米のおれにはよく分からない。区分機は、郵便課の真ん前にどでかい装置が設置してあるので分かる。封筒や葉書などの小型郵便物は、これにがんがん流して機械で区分する。

「僕も今日は通常ですから」

「あ、そうなんだ」

「今日は日曜なんで、そんなに忙しくないと思いますよ。小包も少ないはずですよ」

「そう願いたいもんだな」

おれたちは到着した郵便物を積載した銀色のパレットを押して、局内奥の区分場へと移動した。

深夜の局内は静かだ。職員の大半は帰宅し、残っているのは数人

の役職者と、おれたち深夜勤のゆうメイトくらいだ。

集配課のデスクの前を通過し、区分場に到着すると、パレットを開いて郵便物を出してゆく。

ケースに詰めてある郵便物を一抱え持ち、それぞれ区分だの前に立ち、区分をはじめめる。

区分だな、というのは小さな長方形の升に別れた鉄製の箱だ。学校にある下駄箱の、蓋がついてないものを想像したら、それでいたい合ってる。

その区分だには細かく番地が振ってある。たとえば「杜王町12-198」という風に、その地区の番号が大ざっぱに割り振ってある。

郵便物を道順に沿って細かく組み立てるのは、実際に配達する職員さんの仕事だ。おれたちメイトは、職員の組立の手助けのため、大まかに分類していくだけでいい。

大まか、とは言っても、ひとつの支店の担当地区は結構広いため、覚えるのはなかなか大変だ。特にうちの区は、番地の旧番と新番が入り混じっているんで一手間だ。

おれなどはいちいち新旧対応表と睨めっこしなくてはならないが、太一は流れるような動作で郵便物を区分する。

「おー、早業だな」

「こんなの工藤さんだって半年もしないで出来るようになります。むしろ、出来ない朝までに片づきませんか」

「早朝勤に文句言われちゃうな」

太一の手の動きを真似して素早く区分しようとしてみるが、なかなか上達しない。手にした郵便物の住所を読み取るとき、どうしても動きが一瞬止まる。

難しいな。

住所が表記されている場所が、郵便物によってバラバラなのがくせものだ。ぱつとみると、どこが住所なのか分からず目がすべる。

それに加えて、手書きの拙い字から、DMの小さな印字まで、さ

さまざまな文字の種類があるのが厄介だ。

差出人があやふやな住所で送ってきたり、宛名ラベルの表記が誤っていたりするので、油断するとすぐ誤区分が生じる。

一枚二枚なら誤差の範囲だが、あんまり誤区分が多いと職員から文句が飛んでくる。

「おい工藤」

かさばるタウン誌を区分だなに突っ込んでいると、背後から野太い声で呼ばれた。

「かごが満杯だ。集配課の前まで持ってつてくれや」

横柄な口調で命令するのは、六十すぎのごま塩頭の爺さんだ。石津琢郎という、ここの支店のゆうメイトでは古参株である。

「これ区分し終わるまで待っててください」

「いいから早くやれよ」

石津の爺さんがイライラした様子で指図する。おなじメイト同士なのに、古参だからか、まるで部下に命じるような口調だ。

わざわざ反撥するのもくだらないので、おれは愛想よく返事をし、郵便物で一杯のかごを集配課まで運んだ。

深夜に区分される郵便物は結構な量なので、かごが一杯になると集配課の方へ持って行き、カラのかごをカートに積んで戻ってくる。つたく、人使いの荒い爺さんだ。

嘆息して戻ってくると、石津の爺さんが、何故かしめっ面で出迎えてくる。

「おい工藤、なんだこの区分は？」

「はあ」

「相生町の三丁目はこの下の棚だろ。半分近く間違ってんじゃねえか！」

「あ、それ一時的に入れてあるだけなんで心配ないです。それにあとでかごに入れ直した方が効率的ですから」

「バカが。んなことやってるから、おまえぜんぜん仕事覚えねえんだろ！」

石津が塩辛い声で頭ごなしに否定してくる。

正直、むっとする。

上司ならともかく、単なる先輩にここまで言われるのは業腹だ。高校時代のおれなら、絶対逆ギレして即日仕事をバックレてる。

が、大学生にもなつてその程度でバイトを辞めたら忍耐が足らなすぎる。第一、すぐ金欠になるのは明白なので、おれは適当に申し訳なさそうな顔をして詫びを入れた。

「ったくよー、なんなのあのジジイは？」

「石津さんは誰に対してもあんな風ですよ。僕も新人の頃は、よくいびられました」

石津から離れたところで愚痴ると、太一がはんなりと眉をしかめる。

「けど、あんな風に否定されるのはなあ。おれのやり方の方が、絶対楽なのにな」

「古参の人って、自分のやり方にポリシー持ってるんで、新人が効率的な手法でやると嫌がるんですよ」

「昔かたぎの職人かよ……」

むすつとした仏頂面で黙々と区分する石津を、おれは横から睨みつける。

そうこうするうち休憩時間になったので、おれたちは食堂に引きあげることにした。

昼間は職員で賑わう社員食堂も、午前三時ともなると閑散としたものだ。自販機の駆動音が、やたらと小うるさく聞こえる。

適当な席に座って羽根を伸ばしていると、そろそろと別の担務の深夜勤が戻ってきた。

ニコチンを入れに喫煙室に行く人や、テレビのリモコンをまわす人、携帯ゲーム機をはじめの人、椅子を並べて仮眠をとる人。めいめい好き勝手にすごしている。

コンビニの弁当をレンジで温めてもそもそ食っていると、突然う

なじに熱い感触がした。

「あちち！」

「あ、ごめん熱すぎた？」

「なんだ樋内さんか」

どこことなく鼻にかかったハスキーな声に、おれはほっと胸を撫でおろした。実際はさほど熱くなかったが、まったり休憩している最中だったので不意打ちだった。

「ごめんね。おどかさうと思って」

樋内さんがおれの隣の椅子に座る。

空気が動いて微かにベルガモットのにおいがたちこめ、思わず胸がどきつとした。

樋内さんの香水か。

さすが妙齡の女性だ。これが他の男どもなら、隣に座られると加齢臭と腋臭で不愉快な思いをするだけである。

樋内千紗さんは、ゆうメイト深夜勤の紅一点だ。肩まである髪をシュシュで束ね、薄手のとっくりセーターに薄藍色のジーンズという活動的な服装だった。

愛用のベージュのセーターはぱつんぱつんで、樋内さんの丰满なバストラインがエプロンごしでもよく分かる。

てか、正直反則級のエロさだ。

「はい、コーヒーどうぞ」

「あ、すみません」

つい胸もとに吸い寄せられがちな視線を厳しく戒め、おれは甘ったるい缶コーヒーをちびちび舐める。

「林くんから聞いたわよ。石津さんに絡まれてるんだってね」

「そうなんですよ」

「おかしいわね。石津さん、わたしにはにこにこ愛想よくしてくれるけど」

それは貴女が美しくて、なおかつあの爺さんが助平だからですよ、と喉もとまで出かかった言葉を激甘コーヒーで呑みくだした。

「工藤くんって、何回生？」

「は？」

「あ、大学何年生？」

樋内さんが思い出したように言い直した。

大学の学年を回生で表すのは関西流だ。もしかすると、樋内さんはそっちの生まれなんだろうか。

「二年です」

「そっか二年生かあ。若っかいなー」

年寄りくさい台詞を吐きながら、樋内さんはメランコリックな姿勢で頬杖を突く。

院の博士後期課程に所属する樋内さんは、大学に残って専攻の東南アジア史研究をつづけるかたわら、生活費の足しにゆうメイトをやっているそうである。

女子高時代はチアリーダーイングの土台だったと豪語するだけあつて、腕力はそこらのもやし男子とは比べものにならない。十キロの米袋程度なら軽がる肩に担いでしまう。

これほどの美人で、かつ明晰な頭脳を持ちながら、どうしてこんな冴えない場所で働いているのかは永遠の謎だ。

「石津さんもね、ああみえて結構苦労人なのよ。一昨年の暮れに、奥さんを自動車事故で亡くされて、ずっと独身暮らししてるみたいだから」

「ほかの家族は？」

「娘さんがいるみたいだけど、なんだか疎遠らしいのよ。まあ、この辺の事情は深くは訊けないから漠然としてるけど」

樋内さんが難しい顔をする。

奥さんに先立たれ、男やもめの独り暮らしと聞くとなんだか気の毒になる。むろん、だからと言って横暴を許す気にはなれない。

休憩時間がそろそろ終わるので、おれたちは食べた後始末をして席を立った。

喫煙室からぞろぞろと不景気な顔をした男どもが出てきて、一日

の後半戦の火蓋が切って落とされた。

食事休憩を挟んだあとは、たいてい小包の応援にまわる。

半地下にあるトラックの発着場に向かうと、ちょうど港からの大型トラックが到着したところだった。

荷受け口の両開きのドアが全開にされ、真冬の冷気がびゅうびゅう吹き込んでくる。パーカー一枚だと凍える寒さだ。

運転手が白い息を吐きながら運行表をわたし、樋内さんがそれを受け取って日付印を捺す。その間に、応援のおれと太一が、トラックに満載のパレットを局内に運びこんだ。

「おいおい、話が違うぞ。コッ大量着弾じゃねえかよ」

大量に到着したゆうパックを前に、おれは太一に絡んだ。

「あらー案外多いですねえ」

太一は呑気なものだ。

これでもお歳暮お中元なんかの繁忙期に比べたらましですからね、などと言いながら、さっさと到着入力にまわる。

おれは重い米袋やら缶ビールのギフトセットやらをふうふう言いながら運び、到着入力の済んだ小包を片っぱしから区分してゆく。

時刻はすでに午前四時をまわっている。これからどんどん荷物が輸送されてくるので、早め早めに処分しないと、トラックヤードが銀パレで埋め尽くされることになる。

落ちモノパズルゲーと一緒に、ある程度荷物が溜まると身動きが取れなくなつて極端に作業効率が低下する。そうなる前に片づけてしまわないと大変だ。

「ほら、おまえらさっさと運べ。詰まっちゃまうぞ。そら、ボケっとしてんな！」

石津が声を荒げて指図してまわる。

偉そうなことを言うのなら、お手本をみせてくれって感じだが、当人は応援するでもなく、区分機の方を手伝ってお茶を濁している。力仕事をしたくないので、なるべく楽な方を手伝おうとしているの

だ。

「仕方ないですよ。ご高齢ですし」

「ご高齢だったって、おれよか高い時給もらってるんだぞ。せめて手伝ってくれよな」

「ですよねー」

「ですよねー、じゃねえっての。」

職員に注意してもらいたいが、肝心の課長代理はデスクに引っ込んだまま出てこないし、古参の石津には文句を言わない。実質、現場は横暴爺さんの言うがままだ。

「畜生、なんなんだよ……」

ゴルフバッグやらスキーバッグやらを両手に持ち、血を吐く思いで運搬した。一便片づく前に次の便が到着するので、現場は脳梗塞を起こした血管並みに詰まってきている。

「ほら、工藤くんガンバ」

横から励ましてくれる樋内さんだけが、唯一のおれの癒し、心の拠り所だ。

彼女が微笑みかけてくれるだけで、疲労困憊の体にふしぎな活力が湧いて出てくる。

それから四時間近く、おれたちはひたすら荷物を運んだ。持ち、運び、積み、下ろす作業をひたすらひたすら反復した。

早番なので六時上がりなのだが、とても片づかないので二時間分の超勤までして、どうにか今朝の到着分を全部片した頃には、午後八時すぎだった。

「お、終わった……」

最後の一個を運び負えると、おれはへなへなと壁にもたれた。

周囲は出勤してきた委託業者が行き交い、現場は殺気だった雰囲気だ。呑気に突っ立っていると舌打ちされるので、そそくさと退勤のハンコを押して食堂に帰還した。

「あ、お疲れさま」

ポカリを手にした樋内さんが、フェイスタオルで汗を拭きふき笑

顔を振りまく。

彼女だつて疲れているんだろうに、おれと違って嫌な顔ひとつしない。人間が出来すぎてて、ちょっと気後れすら感じる。

「お疲れさまです。お先失礼しえす」

疲れ果ててぞんざいな口調になる。

こんな日はさっさと帰つて酒呑んで寝るに限る。所属ゼミのレジユメ作成の件が頭に浮かんだが、光の速さで揉み消した。

「あ、待つて工藤くん」

「なんすか？」

「ねえ、工藤くんつてお肉好き？」

「えっ……あ、まあ」

好きですよ、好き好き、とくに樋内さんのそのエプロンの下のナイスな肉とか大好きです、と心の中で付け足した。

「お歳暮でもらった米沢牛があるんだけど、わたしお肉だめなの。良かったら、工藤くんうち来ない？」

「おれが樋内さんちに？」

「遅めの新年会を兼ねて、焼き肉をやろうと思うの。どうかしら？」

おいおい、なんだこの強運。年始早々、今年の運氣を使い果たしちゃったか。年末あたり運氣欠乏で死ぬ予感。

「たいしたおもてなしはできないけど」

「行きます」

むしろ行かせて頂きます、的な心境だったが、そこまで言うときモがられるので、素っ気なく、だが確乎たる意思を伝える。

「良かった。じゃあ、林くんと一緒に来週辺り来てくれるかしら」

「太一と？」

おれの心の中で何がへこむ音がした。

「ええ、肉の量が多すぎて工藤くん一人だと食べきれないと思うの」

「あー、いやその」

おれ一人でも二人前食べます、と言おうとして尻込みする。食いしん坊だと思われるのは嫌だし、下心を悟られるのは論外だ。

「じゃあ、来週の都合のいい日を教えてくれる。太一さんと合わせて日時決めるから」

「あとでメールしときます」

「うん、じゃあメアド教えとく」

さりげなくメアドまでゲットした。

これならたとえ邪魔者付きだろうと十分モト（？）は取れた。高望みしたらきりがないし、メアドと高級焼き肉で手打ちだ。

スマホのメーラーを開く樋内さんの真っ白な細い指を見つめ、おれはだらしなくでれでれと鼻の下を伸ばすのだった。

口・異世界転移は突然に

都営地下鉄の階段を上ると、冬の鉛色の空がおれたちを出迎えてくれた。

「樋内さん宅は、駅から徒歩八分程度ですね。途中、何か買って行きますか」

「意外とのどかな場所だな。都心の一等地って感じじゃねーな」

都会の喧噪はどこへやら、駅から少し離れると、もう住宅街のど真ん中だ。入り組んだ路地裏に、小さな戸建てやおんぼろアパートがちまちま軒を並べている。

「ここいらは東京の下町ですからね。昔からの景観が残ってるんですよ。ぶらぶら歩くのに最適です」

「へえ、詳しいな」

「大学が渋谷なんで、授業の合間にあつちこつち探険してまわってるんです」

下町散策とは渋い趣味をしている。今から老後に備えて足腰鍛えてんのか。

ボンネットの上でまるくなるのら猫をひやかし、町工場のプレス機のうなる横の小径を通って行く。

「あ、ここですね」

太一が地図アプリの画面を指さした。

樋内宅は昔ながらの一軒家だった。トタン葺きの切妻屋根に格子ガラスの戸がある。NHKの朝の連ドラに出てくるような、昭和のにおいがぶんぶんする木造平屋だ。

「なんかイメージと違う。おれの知ってる樋内さんは、もっとこう、オートロック完備のレディースマンション住まいで……」

「何ぶつくさ言ってるんですか」

太一がさっさと呼び鈴を押した。

「あ、おまつ」

「樋内さん遊びに来ました」

間延びした声で呼びかける。

レディーの自宅を訪れるのに、こいつには躊躇いというものはないだろうか。

ジー、とこれまた古風な呼び出し音がして、スリッパの鳴る音がしたかと思うと、がらつと勢いよく戸が開かれた。

「いらつしゃい。中にどうぞ」

「邪魔します」

「ゴメンね、散らかってるけど」

そう肩をすくめるが、実際、さほど散らかってない。むしろ床板がぎしぎし鳴るのと、すきま風が吹くのが気にかかる。貧乏書生の下宿的レトロ空間だ。

「この家、建つてどのくらいなんです」

「ええと、たしか築六十三年」

「六十三年？」

戦後間もなくに建てられた家だったとは驚きだ。擦り切れた畳おもてや、釘の飛びだした梁など、時代の流れを感じさせる。

奥の六畳間に落ち着くと、ちゃぶ台にケンタッキーやパック寿司を並べ、なみなみ注いだビールで乾杯をした。

「かんぱーい」

一気にグラスをあおるおれと太一。

樋内さんは肉の仕度のため、野菜を刻みにお勝手に立った。さく、さくと玉ねぎを切る快い音がお茶の間に響きわたる。

エプロン姿の樋内さんの楚々とした後ろ姿は犯罪的な可憐さだ。

おれが彼氏なら、そのまま抱きついて尻を撫でまわし「や、包丁握ってるから」と顔をしかめる樋内さんの耳もとで「じゃあ包丁以外のものを握ったら？」などと……

「工藤さん、工藤さんてば」

太一のもさつとした声で妄想が醒める。

「なんだ太一。今おれはすごく忙しい」

「樋内さん、タレ買い忘れてたらしいんです」

「……おいおい」

焼き肉なのにタレなしとは。お好み焼きなのにソースを買い忘れるに等しい愚行だ。

が、逆に考えるんだ。太一をパシリにやったらその間二人きりだと考えるんだ。

「ふむ、となると肉を振る舞われる側の人間、すなわちおれか太一が買い出しに行くべきだろうな。その場合、当然ながら年下のキミが行くのが筋というものだ」

「もう行っちゃいましたよ」

「……そうか」

おれのはしたない妄想中に、樋内さんはエプロン姿のまま、ととと、と部屋から飛び出したそうである。

「太一、人の夢とは儚いものだな」

「何言ってるんですか。工藤さん、ひよつとして酔ってます?」

訝る太一をよそに、おれは力が（おもに下半身から）抜けるのを感じた。

ま、今日は小賢しいのは抜きで楽しむか。

気持を改めると、げんきんなもので、とたんに胃袋がぐうと鳴る。

「楽しみですね、松阪牛」

「米沢牛だ」

ブランドすらうる覚えの太一に食わせるのは惜しい気がするが、せつかくの招待だ。みんなで楽しくやるのが一番である。

「ま、呑むべ」

「お供します」

樋内さんが帰ってくる前に、おれたちはビールでふたたび乾杯をした。

まわる、目がまわる。

ぐるぐる程度なら可愛げがあるが、ぐるんぐるん世界が大回転す

るから穏やかではない。明らか呑みすぎだ。

おれは呑みかけの缶チューハイを一気に呑み干すと、絶賛回転中の六畳間を見わたした。

まず、太一が死んでいる。

樋内さんにしこたま呑まされたのだ。

焼き肉のタレを買って戻ってきたあと、遅れを取り戻すペースで樋内さんはハイボールをぐいぐい呑んだ。

ほお、これは酒豪のたぐいだな、と感心しながら樋内さんの見事な呑みっぷりを鑑賞していたら、みるみる酔いがまわりだした。

「ちよつと、太一くん呑みが足りてないね。呑めるんならもつと呑みなさい」

「あ、はい頂きます」

ジト目でおれたちを睨み、赤ら顔で太一に絡みだした。

「ほら呑んだ呑んだあ」

「ではお言葉に甘えて……」

くそまじめな太一は、酔っぱらい相手にていねいに献盃を受ける。おれなら適当に呑んだふりをして誤魔化すところだ。

「よし男らしいぞ。じゃあ二杯目ね」

「ええっ」

樋内さんの方も、一杯二杯ならまだしも、太一が呑み干すたびに新しい酒を注いでくる。岩手のわんこソバ並みだ。

そうこうするうち太一は酔い潰れ、樋内さんはどこから持ちだしたのか、へべれけで壁にもたれてウクレレを爪弾きだした。

ぺんぺん、下手くそなウクレレの音色に合わせて、るらーとこれまた下手くそな鼻唄をうなる。

「うわあ……」

憧れの女性が部屋呑みで本性をさらけ出すのは、正直見たくなかった。才色兼備の完璧超人のイメージが音を立てて崩れる。

でも逆にその人間くささが良いよね、とおれの中の性欲の悪魔がフォローを入れた。

「うん、たしかにイイ」

ちゃぶ台を挟んだ反対側に座る樋内さんを、おれはこそこそ盗み見る。

酔い潰れて警戒心がほぐれたのか、薄い花柄のワンピースのすそから、むちつとした太腿があらわになる。

ちゃぶ台、邪魔すぎ。

おれは今日ほど座卓を忌々しく感じたことはなかった。

この板きれさえなかったら、樋内さんの太腿と太腿の合間の聖域が拝めるのだ。

男児たるもの、アドベンチャー精神を忘れるなかれ。

さっきまでの賢者時間はどこへやら、どうにかしてちゃぶ台の下を覗けないものか、とおれは首を捻る。

やむを得ん、おつまみを落としたフリをしてインナーの柄チエックとしゃれ込むか。

漢気をこめてピーナッツを畳に落とした瞬間、太一がふらふらと立ち上がる。

「も、漏れる……」

「おい！」

どっちだよ、と小声で問うと、両方だと言っただから由々しき事態だ。

お手洗いはどこかと尋ねるが、樋内さんは酔ってて返事の内容を聞かない。

「ここね、トイレないの」

「んなバカな！」

じゃあ貴女はどこでするんだ、と問い詰めなくなる気持ちをぐつとこらえ、どうにか聞きだした。

どうやらお手洗いは建物の外にあるらしい。以前、下宿だった頃の名残で、今でも共用便所を使っているそうである。

「だよ。太一歩けるか？」

「無理でしゅ」

「ガチで無理そうだな……」

六畳間でただ漏れされても困るので、おれは太一に肩を貸して誘導した。

「すみません工藤さん」

「謝らんでいいからしゃんとしろ」

千鳥足の太一が寄りかかってくるので、一緒になつて転びそうになる。

樋内さんの案内に従つて、おれは太一を伴つて玄関から出た。

外はすっかり日が暮れ、峻烈な木枯らしが服の生地を貫いて刺してくる。

アルコールで火照つた手足がたちまち冷たくなるなか、おれは敷地の片隅にぼつんとある共用便所の戸を開き、太一を押しこんだ。

「工藤さあん」

「甘えんな。あとは自分でやれ。できるだろ？」

「ううう、やってみます」

正直これ以上は面倒みきれん。職場で気まづくなるのはご免だ。

太一が上下の始末を終えるあいだ、おれは外に棒立ちして庭を眺める。さすがに何かあつたら駆けつける用意はしておく。この寒空の下、放置して倒れたら可哀想だしな。

「うう、さぶ……」

おれは両腕をさすつて縮こまる。

太一を連れだすどさくさで、上着を着そこねてしまった。分厚いトレーナーを重ね着してきたのがせめてもの救いだ。

「ったく、やれやれだ」

喫煙者なら一服する場面だが、煙草を飲まないおれはこんなとき手持ち無沙汰だ。

無聊にかこつけて、樋内さんちの庭をぶらぶら見てまわる。

草ボーボーの庭先は荒れ放題だ。ろくに手入れされてない。毎日、大学にバイトと忙しく、どうにかする暇がないんだろっ。

うん？

庭の片隅の葉を散らした金木犀の傍らに、見慣れないものを発見した。

「井戸か」

声にだしてつぶやく。

石積の小さな井戸だ。長い年月にさらされて、石のふちが矯められてまろくなっている。きっと上水道が開通する前からここにあるんだろう。

水、貯まってるのかな。

ちよつとした好奇心から、おれは井戸の蓋をはずした。朽ち木の板にブロックで重しがしてあるだけだから簡単に開いた。

お、水音が聞こえるな。

仄暗い井戸の底から、かすかにひたひたと水の打ち寄せる音がする。鍾乳洞の奥のような澄んだ水の音色だ。

思わず聴き惚れた。

それが拙かったんだろう。自分がそんなに酔ってないと過信していたのもある。

次の瞬間、両足が地面から離れた。

あ、まずい、と思う間もなく、おれは井戸の中に頭から転落した。澱んだ生臭い水を飲んだ。鼻から口からしこたま飲んだ。落ちた姿勢がわるく、狭苦しい井戸の中では体勢を立て直せない。

誰か！ 誰か助けてくれ！

つま先でがんがん井戸の側面を叩き、外の太一に報せようとしたが、その努力もむなしく、水を飲んだおれは一分もしないうちに完全に意識をなくしたのだった。

ハ・ハローアナザーワールド

ごぶ、と口から特大の気泡が漏れる音がして途切れた意識が覚醒した。

酸欠気味にしては、驚くほど意識が冴えている。パニックすら起こしていない。

まだだ。まだいける。

おれはゆっくりと水面を目指して体を動かした。呼吸さえ確保すればどうとでもなる。冷静になれ。しくじるな。

落ち着いたせいか、水温がやけに生ぬるく感じる。真冬の井戸にしては温かい。それとも地下水はそこまで温度が下がらないものなんでしょうか。

おれは体を捻るようにして脚を畳むと、百八十度回転した。頭上から太一が懐中電灯で照らしてくれているのか、明るい方へとしげんと体が動いてゆく。

「ぷはあ！」

水面めがけて一気に頭を突きだした。

胸一杯に空気を吸い、酸素の有り難みを肺で噛みしめる。

「はあ……はあ……」

荒く息を吸い、垂れてくる水を拭って目を開くと、おれは思わず硬直した。

「……は？」

おれが立っているのは水深数十センチほどの浅瀬だった。ぬるい水の中に、大量の藻が浮かんでいる。水中で暴れまくったからか、全身藻まみれだ。

訳が分からない。

「は？」

頭が真っ白になる。

たちのわるい冗談か何かだろうか。井戸に落ちて、水面に顔を出

したら見知らぬ場所だなんて前代未聞だ。バカげてる。

「まさか死んだのか？」

天国にしては殺風景だが、一応その可能性を疑ってみる。

おそろおそろ胸に手を当てると、とくと心臓が力強く脈動した。どうやら生きているらしくほっとする。

が、そうなるとますます状況が理解できない。ここが天国でもなく井戸の底でもなかったとしたら、一体どこなのか。

とにかく、ぬれた体を乾かさないと。

おれは岸にあがると、人目を避けるようにして右往左往し、トネリコの木の木陰で服を脱ぐことにした。

水を吸って重たいトレーナーや下着を脱ぎ、きつく絞る。藻も全部引っぺがした。

辺りは温かく、全裸だと少々肌寒い程度の陽気だ。少なくとも真冬の都内の気温ではないのはたしかだった。

となると、どこか別の土地だ。

「まさか、な」

荒唐無稽な妄想が膨らむが、確認するまでは断定したくない。ここが異世界だなんて想定は、およそ科学的ではない。

「ほんと何なんだよ」

愚痴りながら生乾きの下着を穿いていると、木陰に生い茂る灌木の中から、ぬつと見慣れない老人が顔を出した。

「うお！」

パンツ一丁のまま硬直する。

よれよれのフード付きローブに身を包んだ短軀の老人だ。大きく腰が弯曲し、櫛材らしき杖を突いている。

「これはその、その川で溺れて……」

しどろもどろに弁解する。

老人は何やら口にした。

最初、発音がわるくておれが聞き取れないだけかと思った。ゆうメイトの深夜勤でも、たまにそういう人がいるからだ。

だが違った。老人がしゃべっているのは、日本語とはまったく別の未知の言語だ。

「はあ？」

まるで意味が判然としない。大学の第二階国語ですら単位を落としたこのおれだ。意味が分からずポカンとする。

老人の方も言葉が通じないのに気づいた。だが向こうさんはさして動じる様子もなく、手真似に切り替える。

「こつち来い？」

おれが指さすと、老人は小さくうなずく。そして諒解も待たずさつさと歩きだした。

「あ、待ってくれ」

おれは水の滴る服をまとめると、慌てて老人のあとを追う。

ふと空を仰いで、太陽が二つあるのに気づいたが、あえて見なかったことにした。

これ以上、あれこれ考えるとパニックになる。とにかく今は追うのが先決だ。

川を遡って行くと、石積の城壁らしきものが見えてきた。十メートル近い高さを誇る苔むした巨大石塁だ。

「ほお、城塞都市か」

雄大な光景に見とれそうになるが、老人がどんどん進んで行くので、立ち止まってもいられない。

てつきり城壁の門から入るのかと思ったが、老人が足を向けた先は門とは正反対の位置にある下水道の排水口だった。

老人はフードを脱ぐと、排水口の鉄格子を両手で掴んだ。親指ほどの太さの鉄棒が嵌めこんであつて、とても動きそうになかったが、ちよつと力を入れてずらすと、格子がすぽんと引っこ抜ける。手抜き工事だ。

「……中に入れと？」

老人の手招きにおれは尻込みする。

生まれてこのかた、下水道に立ち入るのは初めてだ。というか、水道管工事の人間でもなかったら、一生涯入らない。

だが、今はほかに行くあてもないのだ。老人の機嫌を損ねたくない。

下水道は、大人一人が辛うじて通れるほどの狭さだった。天井の高さはそこそこあるので、腰をかがめると楽々歩ける。

少し進んで行くと、沈澱池らしき水路がある。中に溜まっているのは脂ギトギトの汚水で、野菜の腐ったのやら、動物の白骨やらが浮かび、すさまじい悪臭だ。

真夏の河川敷の仮設便所の二オイを、さらに数十倍に煮詰めたような悪臭である。

一瞬、気が遠くなる。

が、老人は平然とした顔で池の横を歩いて行く。おれは吐き気をこらえながら、必死であとにつき従う。

さつき飲み食いした酒や焼き肉が、胃の中でめまぐるしく流動する。吐くまいと思ったが、途中で力尽きてその場にゲロした。

おえええつ、と唾液を垂らしてえずき、胃の中身をすべて石畳の床にぶちまける。

「ひっ！」

と、下水の壁の割れ目から、数匹のドブネズミが走りだし、おれの吐瀉物めがけて一斉に突撃してきた。

猫ほどの大きさの巨大なネズミだ。互いに咬みつきあつて牽制しながら、未消化の肉塊をちうちう鳴きながら貪っている。

「なんなんだよこ……」

ぞつとして身震いする。

そこからさらに幾つかの処理施設を抜けて行き、ようやく到着したのは制御室とおぼしき小部屋だった。

どうやら下水に流れこむ水量を調節するための水門を開閉する施設らしく、各種レバーの横に金属の銘板が貼りつけてある。

「……読めん」

銘板に刻みつけてあるのは、これまた見覚えのない文字だ。ヒエログリフ的な象形文字の下にくねくねした表意文字が刻んである。

「ここがあんたの家なのか？」

おれの問いに、老人は首をかしげる。

どうもその機械室が老人の住み処らしかった。服装から薄々そうではないかと思っていたが、老人は浮浪者だったのだ。

機械室にはほかにも四人の浮浪者がいて、部屋の中央で焚き火を焚いている。

突然あらわれた新入りのおれにも、まるで関心を示すことなく、むつつりとした様子で炎に薪をくべている。

おれと老人は焚き火の前に車座になって腰をおろした。

「あ、服乾かしているのね？」

老人が服を指したので、おれはありがたくずぬぶれの服と体を乾かした。

ぱちぱち、と樹脂の多い薪が爆ぜるのを見つめながら、おれは無言で体を暖める。

頭はまだ混乱してしっちゃんかめっちゃかだったけど、焚き火の前にしていると、ふしぎと心が安らぐのを感じる。

体の芯が温まると、だんだん眠くなってくる。服もほとんど乾いたので、それを着てごろんと横になる。

ここで寝て大丈夫なのか、との疑問は湧いたけれど、猛烈な睡魔には勝てない。どのみち盗まれるようなものもないし、殺されたら殺されたでそのときだ。

おれが「眠りたい」と手で枕をつくるジェスチャーをすると、通じたのか老人が小さく首肯した。

ご厚意にあまえて一休みすることにした。寝ているうちに、元の世界に戻るんじゃないか、との淡い期待を抱きながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7652z/>

勇者はひらりと身をかわし

2011年12月27日01時46分発行